

氏 名	シバ ヤマ タク ロウ 柴 山 拓 郎
学 位 の 種 類	博 士 (美 術)
学 位 記 番 号	博 美 第 303 号
学位授与年月日	平成22年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉sliced piano projections 〈論文〉電子音響音楽における文脈構造の空間的散逸から生じる新たな表現の可能性に関する研究と実践
論文等審査委員	
(主査)	東京芸術大学 准教授 (美術学部) 古 川 聖
(論文第1副査)	〃 教 授 (〃) 伊 藤 俊 治
(作品第1副査)	〃 〃 (音楽学部) 西 岡 龍 彦
(副査)	〃 〃 (美術学部) た ほ り つ こ
(〃)	国際基督教大学 名誉教授 金 澤 正 剛

(論文内容の要旨)

私たちが「音楽」と呼んでいる対象とは、なにを以て「音楽」になり得るのか、そしてその聴取とは、何を以て成立するものなのであろうか。どのような「音楽」であれ、その全体を構成する要素とその集合から成り立つ。音楽理論や作曲技法は、「音楽」の構成について、一つの視点から捉えたものに過ぎない。音楽理論的に矛盾しない構造は即座に「音楽」として成立するであろう。しかし一方で、音楽理論的な矛盾を意図的に用いるような表現は数多く存在する。さらに、「音楽」は歴史の流れのなかで、その理論的な整合性そのものを拡張することで〈進化〉したともいえる。

では「音楽」を「音楽」たらしめている要因は何なのであろうか。同様に「これは音楽ではない」という定義は、何に対するどのような定義として成立するのであろうか。新たな「音楽」の創造には、その要因に関する詳細な検証が必要であり、その検証によって、筆者が提示する「拡張された音楽」の創出に関わる思考のプロセスを明らかにすることが可能となる。本研究では、それらの要因について、

- 1) 「音楽」の発展とその過程で〈進化〉した人間の感性
- 2) 「音楽」の知覚と認識
- 3) 「音楽」と「言語」の構造の比較
- 4) 「音楽」と「言語」における抽象的概念の知覚

という視点から明らかにしている。そのプロセスには、常に「音楽」〈である〉ものと「音楽」〈ではない〉ものとの概念的な境界を拡張するための思考が働く。ウィットゲンシュタインは、「思考は、思考される状況が可能であることを含んでいる。思考しうることはまた可能なことでもある」(ウィットゲンシュタイン『論理哲学論考』3.02)と指摘しているが、その境界をいかに拡張するのかを、思考のみによって明らかにすることは困難である。なぜならば、その思考は思考によって生み出されたものであり、その思考を生み出した思考もまた、思考によって生み出されたものであるという無限の縮退に陥るからである。

このような思想や思考が、筆者が表現実践として提示する「拡張された音楽」創出の背景にある。無論、それらの思想や思索の堆積としてここに提示する具体的な作品があるのではなく、その作品を創出

することを可能とした、あるいは今後も可能とするであろう何らかの「要因」を考えると、このような思想・思考的背景の存在がはっきりと意識されるのである。

「拡張された音楽」は、「眼で見る」「耳で聴く」という私たちの知覚のための器官のそれぞれの役割による類型化が不可能な、より統合的な対象として新たな様態を提示するものである。ギブソンは『生態学的視覚論』において、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の統合的な感覚による対象の知覚のあり方を提示しており、私たちを取り囲む生態学的環境の知覚は、物質（substance）と媒質（medium）の中間に位置する表面（surface）の肌理の連続した配置の知覚であると主張する。そしてギブソンによると表面（surface）に配置された対象の移動や回転、衝突、変型等の変化によって時間は知覚される（ギブソン、1986：16）。ギブソンの指摘は、「音楽」の根本的な構造は、物理的な現象（例えば弦の振動など）が時間の中に配列されることでグループ化され、そのグループから事象が形成され、さらに事象と事象とが接続することで音楽的な文脈構造が産出されるという事実を示している。

本研究の素材となった表現の実践は、筆者が提示する「拡張された音楽」のために設計するマルチスピーカーシステムを用いた空間投影を前提として進められる。この表現において、スピーカーから出力される音響的素材を主として取り扱う理由には以下の二項目が挙げられる。第一に、この「拡張された音楽」の体験において「音楽が演奏されている」という状況的あるいは視覚的なフレームから聴者を解放すること、第二に、断片化された音響素材の再配列により新たな意味が創り出されることである。それは、すなわちモンタージュによる録音された事象の断片の再構成により創出される文脈構造を、マルチスピーカーシステムの設計とコンピュータプログラミングによる表現環境の創造により、空間的に散逸させることによって抽象化するという目的に適していると考えるからである。

本論は、以下の4つの章から成る。

第一章では、「音楽」の構成要素を音楽理論的な構造として捉え、19世紀後半から20世紀に至る「音楽」の進化と、その構成要素の拡張との接点が表示されている。さらに、20世紀の「音楽」において特に大きな意味を持つ「抽象的」な表現について、フェルドマンを取り上げ、いくつかの作品分析を行った。そして、巨視的視点と微視的視点が、私たちの理解可能な次元を超えて横たわるように、かつ動的に共存している様態を、フェルドマンの表現の特徴として明示した。加えて、電子音響音楽によって提示されるアクースマティックな聴取、つまり音の来歴から切り離されることによって、音そのものの聴取行為が可能となるという概念との外延的な接点に、筆者の「拡張された音楽」が位置づけられるのである。

第二章では、人間の対象の知覚と認識の動的な様態に関する考察を中心とする。その考察から、「音楽」である作品が成立する条件について、その受け手の聴取行為を、認知心理学および生態倫理学を基軸とした事象の接続構造の認識と捉える。その上で、「拡張された音楽」を、「音楽」作品の発信者と受け手の中に創出される意味との差分そのものの表現として位置づけている。

第三章では、「拡張された音楽」を、言語と音楽双方の構造における類似点と相違点を示すことが中心となる。筆者の作品『Sliced Piano Projections』が、電子音響音楽や従来の「音楽」の双方から明確に区別される様態をもつことを明らかにするためには、それら双方の表現について、外在化言語的聴取と内在化言語的聴取という、二通りの事象の認識の相違として捉えることが可能であることを明示した。

第四章では、筆者の作品『Sliced Piano Projections』の表現の構造とその意味に関する詳述が中心となる。本作品のプログラムシステムに関する詳述と、そのプログラムが動くことから導かれる表現の意味については、ライヒが提唱する「漸次的位相変位プロセス」、フェルドマンの晩年の作品群におけるフレームの抽象化、そして、電子音響音楽における「アクースマティック」な表現の様態、それぞれとの接点を持ちながら導出される筆者の表現理論「文脈構造の空間的散逸」と「可塑時間的位相変位プロセス」を提示し、筆者の表現創造の在り方とその意味を明らかにした。

(博士論文審査結果の要旨)

音楽と非音楽の境界線上で、独自の論点に立脚し、ありうべき音楽の方向性について、自作の音楽表現を踏まえつつ、明晰に考察した論考である。もともになるサウンドデータを解体し、それらの解体された「音素」を空間的に散逸させることで従来の音楽聴取では起こりえなかった様々な現象が誘発される。こうした新たな局面を認知心理学、文化人類学、メディア学、生態倫理学といった様々な知見を援用しながら大胆に分析してゆくアプローチは独自のものであり、その方向は芸術の意味と価値形成に関する本質的な問題へとむすびついてゆく。文化基盤に関するこのような複眼的な方法論は音楽の置かれている動的で包括的な関係性の網を捉える研究として、これからの音楽生成やソフトウェア開発において、多くの示唆を含んでいると言えるだろう。各章の構成や論述の進め方、細部と全体のバランスなどもよく練られたものである。以上の観点から本論文は学位授与に値すると認め、合格とする。

(作品審査結果の要旨)

音楽の概念が著しく拡大し続ける現代において、改めて音楽を定義することには多くの困難な問題に直面することになる。柴山は、音楽と「感性」「知覚」「認識」さらに「言語」との関係において、音楽と音楽でないものとの概念的な境界を拡張するための思考を検証し、現代における音楽の再定義を試みている。その視点は表現者としての筆者自身の問い『音楽』を『音楽』たらしめている要因は何かから出発し、「眼で視る」「耳で聴く」という私たちの知覚のための器官のそれぞれの役割による類型化が不可能な、より統合的な対象として新たな様態を提示する「拡張された音楽」の方法論を導き、作品『Sliced Piano Projections』として結実した。この作品によって、音楽空間の新たな表現可能性が提起されたことを評価し、合格とする。

(総合審査結果の要旨)

柴山 拓郎は2007年度に東京芸術大学先端芸術表現科の博士課程に入学し、私の研究室で創作、研究に没頭しその研究、見識を深めた。在学期間中においても国内外で作家活動を行いめざましい業績をあげている。今回の博士論文、作品の特質は秀逸な知的構想力とあたらしいテクノロジーの研究が柔軟な感性のもとに総合されている点にあり、論文の視座はさらに音楽や美術領域の外側、社会性を持った表現へと探求が広げられている。表現行為において、表現をその対象、方法の深みにおいてとらえ、その根底にあるものを見極めて、多角的に学術的視点からも検証、総合し、また社会の中での意味を問うて、そこから作品を立ち上げていく彼の創作方法はいわゆる現代音楽やの現代アートではとらえきれない独自の方向性をもつものと言える。彼の提出作品は内容的にも音楽という枠を開くオリジナルな表現に達しており、またその提出論文は先行研究を十分にふまえた上で、独自の論を展開している。論文審査の結果と作品審査の結果を合わせ、上記のような理由により、合格とする。